

弥陀成仏のこのかたは

ご讃題(浄土和讃第三首、讃阿弥陀仏偈讃第一首 注釈版聖典 P557)
弥陀(みだ)成仏のこのかたは いまに十劫(じっこう)をへたまへり
法身の光輪きはもなく 世の盲冥(もうみょう)をてらすなり

ご讃題の和讃()は、浄土和讃の冠頭讃に続く讃阿弥陀仏偈和讃の第一首であり、曇鸞大師の「讃阿弥陀仏偈」をご讃歎になった御歌であります。寧ろ今日の私達にとってはお正信偈を読経するとき、百二十句の偈頌(げじゆ = 詩句)に続く最初のご和讃として親しまれております。

註「和讃」とは、阿弥陀如来のお徳を当時の大和言葉で難解な仏教用語を和らげて(判り易く)説き明かして下さったほめ歌であります。行巻の最後に掲げられた正信偈の偈誦に続いて浄土和讃六句を誦する今日のお正信偈のしきたりが確立されたのは、本願寺八代法主の蓮如上人による文明五年(西暦一四七三年)の開版が最初であります。

「讃阿弥陀仏偈(さんあみだぶつげ)」とは曇鸞大師(どんらんだいし)が主に仏説無量寿経(「大経」と略称します)によって阿弥陀仏とその聖衆(しょうじゅう)、国土の莊嚴相(しょうごんそう)を讃歎された七言一句の偈頌を申します(Ref 七祖註釈版 P161)。

親鸞聖人は、「讃阿弥陀仏偈」を釈して無量寿傍経(むりょうじゆぼうきょう)と名づく。讃めたてまつりてまた安養といふ(Ref「真仏土文類」註釈版 P361))とお読みになり、本偈を經典と同等に見て大切になさいました。和讃に対応する「讃阿弥陀仏偈」において曇鸞大師はまず「南無阿弥

陀仏」と帰命された上で「成仏よりこのかた十劫を歴たまへり。寿命まさに量(はか)りあることなし。法身の光輪法界にあまねくして、世の盲冥を照らす。ゆゑに頂礼(ちやうらい)したてまつる」と仰せであります。

「光輪(こうりん)」とは、仏の光明の働きを法輪(仏の説法)で表わしたものをいい、智慧(ちえ)の光明は「教え」となって人々を照らし導いて下さることを表わしています。「世の盲冥」とは無明煩惱の衆生を指します。

以上を踏まえてこの和讃のお心を訪ねてみることにします。

尚、和讃自身には、寿命無量の言葉は示されていませんが、もとになった讃阿弥陀仏偈には、寿命無量のお徳が示されてあることから、寿命無量のお徳が含まれていることは申すまでもありません。

これは「偈」のもとになった仏説無量寿経では、阿弥陀仏のお徳を四十八願のうちの第十二願の光明無量、第十三願の寿命無量で謳ってあるからであり、また、

仏説阿弥陀経では、「かの仏をなんのゆゑぞ阿弥陀と号する。舍利弗、かの仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障碍(しょうげ)するところなし。このゆゑに号して阿弥陀とす。また、舍利弗、かの仏の寿命およびその人民(にんみん)(の寿命)も無量無辺阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく(Ref 註釈版 P123)」とあって、寿命無量と光明無量が阿弥陀仏の阿弥陀仏たる所以であることが示されてあるからであります。

そこで「讃阿弥陀仏偈」に照らして一首のご和讃の意味を頂戴してみますと「法蔵菩薩が御本願を成就されて阿弥陀仏と成られてからすでに十劫という長い年月を経ておりその寿命は量り知ることができません。

また、阿弥陀仏の御身から放たれる光明の働きは無明煩惱の衆生を照らして下さっています(阿弥陀仏のみ教えは苦悩の人々を照らし導いて下さっています)」となります。

阿弥陀如来の寿命は既に十劫をへて居るということは、ただ今も生き続け働き続けていらっしゃるという意味が言外に込められてあります。

大経に、「無量寿仏の寿命は長く久しくとても計算できないと記されている通りであります(Ref「大経註釈版 P30)。

また、光明の働きは無明煩惱の衆生を照らして下さるということは、衆生のいかなる無明煩惱をも打ち破って届いて下さるという意味が言外にこめられてあるのです。大経に、「無量寿仏の光明は十方の世界に輝き渡り、光明の利益はそのままお名号の功德そのものであるから、十方の衆生に聞こえてこれを喚びさまし念仏の衆生たらしめるとされている通りであります(Ref「大経註釈版 P30、下線部意識)。

最後に、このご和讃の構成を再往します(改めて深いお心を頂戴しなおしていただくことを「再往」といいます)という

第一に、「**弥陀(みだ)成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり**」の二句は阿弥陀仏の寿命無量のお徳(四十八願中の第十三願)を、
第二に、「**法身の光輪きはもなく 世の盲冥(もうみょう)をてらすなり**」の二句は光明無量のお徳(第十二願)を、各々讃歎なされたものであって、丁度お正信偈の初めの二句である帰敬偈の「**歸命無量寿如来**」と「**南無不可思議光(如来)**」に対応していることが読み取れるのであります。

阿弥陀如来様はお名号とおなりあそばし光明無量と寿命無量のお徳を以て念仏の行者に影の形に沿う如く付き添って下さるのです。

リビングライブズー浄土和讃第三首、讃阿弥陀仏偈讃第一首「弥陀成仏のこのかたは」

それゆゑ私がそれと気づくと()気づかないによらず、いつでもどこでも苦しみ悩む私と歩みを一つにし、灯となって、おぼつかないわが人生の道行を照らし続け、導き続けていて下さることでありました。

(あとがき)曇鸞大師とその功績について

「曇鸞大師(西暦 476-542)」は、龍樹菩薩・天親菩薩に続く七高僧の第三祖を言います。天神菩薩の『浄土論』を註釈して『浄土論註(又は往生論註とも)』を著わして下さって、浄土願生の菩薩が浄土往生するの浄土から還り来たって穢土(えど)の衆生をお導き下さるのも阿弥陀如来の優れた本願力による(増上縁 = そうじょうえん)とすることを明らかにして下さったお方であります。

曇鸞大師は、仏説無量寿経の第二十二願文のお心を開いて「阿弥陀仏に『**遇う**』」ことの二義について明らかにして下さったお方であります。

まのあたりに**「見遇(けんぐう)」**と

仏の名を聞くという**「聞遇(もんぐう)」**の二義であります。

このうち「**見遇**」はお浄土で賜る利益(りやく)であるのに対して、「**聞遇**」というのは、迷界であるこの娑婆世界において実現可能な利益(此土の益(しどのやく))であります。後に、親鸞聖人の**現生正定聚(げんしょうしょうじょうじゅ)**のご法義が誕生する根拠になった御文であります(Ref 梯實圓和上 行信教校平成二十一年二月三日ご講義)。合掌(玄宥記)

正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 0一六六
✉ pluto@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥

平成二十一年一月二十九日初版発行、二十一年二月二十三日三訂版の二 2